

「かけがえのない地球 366日空の旅」

ヤン・アルテュス＝ペルトラン [他]写真 クリスチャン・バルム [他]著
(ピエ・ブックス) [一般 748 ア]

これはすごい!!家に一冊置いておきたいと思いました。
綺麗な航空写真集なのですが、ただそれだけではありません。

1月1日から12月31日まで、一日一枚、地球上のさまざまな場所の写真があって、その横に書かれている説明には写真の場所が抱えている影響などが書かれています。と思うだけでなく、環境問題にまを見た後の感想とはまったく違っ
例えば、現在世界的に深刻な化ランドでは消費0%にすることを国はそのほかのエネルギーについ
世界の中から注目をあびているそうです。こういった地球環境を考えて美しい自然や町並みを残していくことは今を生きる私たちの仕事なのではないでしょうか。



いる問題や地球環境に及ぼして写真を見て「あー、きれいだな」で考えさせられ、ただの写真集た考えが頭の中をよぎります。石燃料の枯渇について、アイス目標にしています。また、このでも世界の先進国となっており、

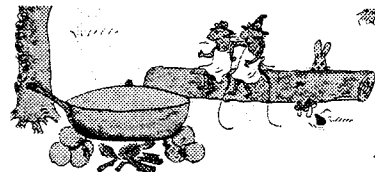
地球環境と言っても、決して難しく考えないでください。身近なことからできるはずですし、ここに載っている航空写真はすてきなものばかりです。ホッキョクグマがヘリコプターで運ばれている光景はちょっと笑えますし、アメリカ・ニューヨークのセントラルパークの楽しそうなスケート場が写っていたり、アパートみたいなゴルフ練習場があったりと写真だけ見ても楽しいです。また、ギリシアのアクロポリスやオーストラリアのグレートバリアリーフなどの世界遺産も載っています。もちろん、日本の写真もあります。大阪城や姫路城、広島原爆ドーム、それから金閣寺に新宿。上空から撮影しているので、普段どこかで目にする横からの写真とは違う見え方ができて面白いと思います。

一気に全部読むよりも少しずつ読んでいきたいものです。日付が付いているので、一日ひとつずつ見ていたら1年間楽しめます。(2月29日があるので、うるう年にはびったり1年です)こんなに長い期間楽しめる写真集はあまりないでしょう。ただ、一日ひとつで止められるかどうか心配ですが、みなさんもぜひ見て、読んでください。

[司書 小林友治]

☆☆☆「ぐりとぐら」のかすてら作り報告☆☆☆

2月5日(日)、に16人の子どもたちが集まって、絵本「ぐりとぐら」に出てくるかすてら作りに挑戦しました。
おいしくできたね!!



第六十四回 読書会

平成十八年二月十二日(日)
午後一時半〜三時半

『野に出た小人たち』

メアリー・ノートン 作
林容吉訳
岩波書店発行

この本は『床下の小人たち』の続編です。イギリスの古風な家の床下で、ひっそりと生活していた小人の一家ポッド・ホミリー・アリエッティは、人間に見つかり家を追われます。

家の床下では、人間に見つからないように気をつけていれば良かったのですが、野外には危険がいっぱい!さあ小人たちはどんな生活をするのでしょうか?

★★★ 参加者の感想 ★★★

★スリル満点。ドキドキしながら読んだ。ホミリー(母)はここにもいるおばさんだと思いつつ読んでた。ここに出てくる小人はサイズが小さくたっただけで、人間と同じ感覚。もし自分が小人で人間に覗かれたら、どんな感じがするのだろうか?と考えると、なんだかワクワクする。草の実を食べたりとか。大人は先々の事を考えるが、子どもは毎日が冒険。この小人たちもそうだが、大人と子どもでは考え方が違うなと思った。地図と挿絵も良かった。

ら、どんな感じがするのだろうか?と考えると、なんだかワクワクする。草の実を食べたりとか。大人は先々の事を考えるが、子どもは毎日が冒険。この小人たちもそうだが、大人と子どもでは考え方が違うなと思った。地図と挿絵も良かった。

★導入部が人間の話で、なかなか小人が出てこなくて、初めは物語の世界に入っていけなかった。でもここに重要な人間が出てくる。小人たちの生活は明日も知れない毎日。冬が来たらどうするのかと心配するホミリー。そんな中で、父ポッドのリーダーシップはすごい。娘のアリエッティは冒険がしたくてしょうがない。最後に死ぬかもしれない時の夫婦のやりとりが良かった。長年夫婦をやっているところいうもんなんだなあと感心した。

★開拓者の話と照らし合わせて読んだ。人間はあまり物があらずといけないう思った。経験を重ねた父の知恵・アリエッティの冒険心そしてホミリー。三人いるから丁度いいと思った。「借りる」と「盗む」はどう違う?この本では借りていること

になっっているのだが。

★大自然の中の生活は子ども本来の生き方でいい。子どもたちの生活を懐かしがりながら読んだ。今の子どももこういう自然の中の生活がいいのかな?と考えたりした。自分の想像だが、知らないのは人間だけで実はこういう生物が存在するのかもしれない。

この本では「スピラー」という新たな小人が登場します。一匹狼の彼の話でも盛り上がりました。さあ、どんなおはなしか、みなさんも読んで、次回の読書会に参加してみてください。

次回の読書会は

『川をくぐる小人たち』(岩波書店)です。
とき 三月十九日(日) 一時半〜三時半
ところ 白根学習館ルーム2
カウンターで本をご用意しておりますので、参加ご希望の方は申し出てください。どうぞ、お楽しみに。

(中川沙穂里)

